

度を見ながら、授業を運営している。

しかしながら、一般的に大学生は、情報を与えられることを望み、自ら問いを立て、その問いに対する答を見出そうとはしない傾向にある。このような学生に対して、履修者が積極的に授業に参画できるような形態を研究していく必要がある。そのためにも、授業評価を積極的に導入し、学生も、教員と協力して授業を作り上げるのだという意識を浸透させていかなければならない。

授業におけるマルチメディアの利用は、授業内容と教員のメディアリテラシーによって、大きく異なる。今後、研修会などを通して、教員のメディアリテラシーの向上に努める必要がある。

(改善の具体的方策)

授業評価によって得られる、学生からのフィードバックを基に、履修者が積極的に参画できるような授業形態を探る。その際に、今後とも、FD研修会、メディアリテラシー研修会などを定期的に関きながら、授業改善に努めていく。

1.1.4.4 教育成果のあり方

<2003年度に設定した目標>

6.4.1 教育効果の測定

教育効果を測るとは、学力および見識を持った学生を輩出し、卒業生が社会から認知されるかどうかで測定される。神学部は、伝道者育成という創立以来の目的に即して教育を行ってきたが、今後とも教育効果を上げるために、次のように行う。

1. シラバスに、各科目の到達目標、課題などを明示し、学生の学習意欲を喚起する。
2. 平常レポート、平常試験を実施する。これによって、学生の理解度・到達度をはっきりと確認することができる。

6.4.2 厳格な成績評価の仕組み（成績評価法）

1. 厳格な成績評価の仕組みとして、全学的に2005年度よりGPA制度の導入を決定している。これに基づいて成績評価を行う。
2. シラバスに明確な評価基準を示し、学生の学習意欲を喚起する。
3. 少人数の学部である利点を生かして、基礎演習、分野別演習、特殊研究演習などの演習科目を通じて、学生の質を確保する。

【評価項目 6-4-1】 教育効果の測定

- (必須要素) 教育上の効果を測定するための方法の適切性
- (必須要素) 教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況
- (必須要素) 教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況
- (必須要素) 卒業生の進路状況
- (選択要素) 教育効果の測定方法を開発する仕組みの導入状況
- (選択要素) 教育効果の測定方法の有効性を検証する仕組みの導入状況
- (選択要素) 教育効果の測定結果を基礎に、教育改善を行う仕組みの導入状況
- (選択要素) 国際的、国内的に注目されるような人材の輩出状況

(現状の説明)

教育上の効果は通常、定期試験（レポートや筆記試験）によって測定している。しかし、レポートの題目を提示するのが遅くなるなど、十分な測定が行えない場合も起こっている。

教育効果や目標達成度およびそれらの測定方法に対する教員間の合意は、明確なものはない。伝統的な学問体系を持つ神学においては、教育効果や達成すべき目標は自明のことと考えられてきたが、価値観が多様化し、学生のニーズも幅広いものとなりつつある現在、神学部として、新たな目標を設定し、その到達度を測定する方法について合意する必要がある。

教育効果の測定については、教授会の懇談の場などで話し合われるが、上に述べたような意味での合意はなく、印象に基づくものになりやすい。FDに基づいて、有効な測定方法を合意し、そのシステム全体の機能的有効性を検証しなければならない。

それでもなお、キリスト教の伝道者を育成するという神学部の目的に照らしてみれば、卒業生は多く神学研究科に進学し、その後、伝道者となっており、教育の効果は上がっていると言える。卒業生のうち、神学研究科への進学者数および神学研究科博士課程前期課程修了者のうち院内進学者の割合は次表のようになっている。

<大学院神学研究科博士課程前期課程進学者数とその割合>

卒業年度	卒業生数	本学大学院神学研究科進学者数	割合
2004年度	26名	6名	23.1%
2003年度	23名	9名	39.1%
2002年度	15名	10名	66.7%

<大学院神学研究科博士課程前期課程修了後、

伝道者となった者の数・そのうち院内進学者数とその割合>

修了年度	伝道者となった者の数	左のうち、院内進学者数	割合
2004年度	7名	6名	85.7%
2003年度	5名	5名	100.0%
2002年度	11名	8名	72.7%
2001年度	10名	7名	72.7%
2000年度	10名	10名	100.0%

(点検・評価の結果)

大学全体の方針に従い、授業概要・実施計画・学生による授業評価等の項目を内容としているシラバスをネット上に掲載しているが、各科目における到達目標・レベルを明確に十分示し得ていない現状がある。

また、学生に対してどのような教育効果があがっているかを、定期試験やレポートなど、1回限りのもので判断するのではなく、平常の評価やミニツツペーパーなどの方法も取り入れて、多角的に測定する必要がある。定期試験やレポートについても、シラバスにおい

て、学期当初に、その題目などを示しておくことが、教育効果を上げるために有効であると考えられる。

(改善の具体的方策)

学部として、学生が学習すべき内容について、明確なガイドラインを作成する必要がある。また、策定されたガイドラインに照らして教育上の効果を計ることについて、教員間で合意を得るようにする。

シラバスにおいて、各授業の到達目標を明示するよう、FD活動を強化する。

【評価項目 6-4-2】 厳格な成績評価の仕組み（成績評価法）

- (必須要素) 履修科目登録の上限設定とその運用の適切性
- (必須要素) 成績評価法、成績評価基準の適切性
- (必須要素) 厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況
- (必須要素) 各年次及び卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切性
- (選択要素) 学生の学習意欲を刺激する仕組みの導入状況

(現状の説明)

神学部では以下のとおり履修単位数制限を行っている。また、専門基礎科目は、教室等設備の都合から、聴講生を受け入れない措置を執っている。

履修単位数制限について

1年次 春学期・秋学期 各24単位以内

2年次 春学期・秋学期 各24単位以内

* ただし、2004年度以前入学生は1,2年次各学期とも26単位以内

3年次 春学期・秋学期 各28単位以内

4年次 春学期・秋学期 各30単位以内

* 通年科目の単位数は各学期において2分の1でカウントする。なお、「教職に関する科目」は制限単位数に含めない。またMDS（複数分野専攻制）申込手続きを経て履修許可されたプログラムの科目群科目も制限外とする。

成績評価は、シラバスに基準を明示して行っている。学生は多様な評価方法（期末テスト・平常時の小テスト・レポート提出・クラス出席回数・発表・討議への参加度・達成度・クラスへの積極的関わり方・個人面接など）で評価されているので、従来のように一回限りのテストでの評価は改善されている。このような方法は、学生の積極的な授業参加への意欲を動機づけていると評価している。また、2005年度より導入されるGPA制度によって、全学的に、ある程度統一された基準を作り、適正かつ厳格な成績評価がなされると期待される。

学生の質を検証することについて、少人数の学部である利点を生かし、様々な方策がとられている。1・2年次では基礎演習によって、学習の進度を常に見守っている。3年次からは分野別の演習を通して、また、卒業時には、特殊研究演習において学生の質を確保できていると考えられる。その間も、成績不振学生に対しては、教務主任・学生主任が面談を行い、学習態度を含む生活全般に対する助言を行うなど、きめ細かい指導を行い、学生

の質を確保している。

(点検・評価の結果)

大学全体としての成績評価の方法は「シラバス」で公表し、学生に周知しているが、多くは「総合的に評価する」との文言のみがあり、さらに明確に評価基準を示す必要がある。

成績評価について、FD研修会などで、厳格に行う仕組みを検討し、公平な採点が行われるよう、さらなる努力が必要である。

2005年度より導入されたGPA制度については、それをどのように学部教育に取り入れ、生かしていくかを議論し、積極的な利用法を考えなければならない。

(改善の具体的方策)

FD研修を通して、明確な評価基準のあり方を学び、シラバスに明示することで、授業運営を改善する。

1.1.4.5 教育の質の向上

【評価項目 6-5-1】 教育改善への組織的な取り組み

- (必須要素) 学生の学修の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための措置とその有効性
- (必須要素) シラバスの作成と活用状況
- (必須要素) 学生による授業評価の活用状況
- (必須要素) FD活動に対する組織的取り組み状況の適切性
- (選択要素) FDの継続的实施を図る方途の適切性
- (選択要素) 学生満足度調査の導入状況
- (選択要素) 卒業生に対し、在学時の教育内容・方法を評価させる仕組みの導入状況
- (選択要素) 高等教育機関、研究所、企業等の雇用主による卒業生評価の導入状況
- (選択要素) 教育評価の成果を教育改善に直結させるシステムの確立状況とその運用の適切性

<2003年度に設定した目標>

学生の学修の活性化を目指して、シラバスを活用し、授業を改善する。そのために、次のような施策を行う。

1. 授業評価を通して、学生のフィードバックを受け、授業改善に役立てる。
2. FD研修会を継続的に開催して、教員の意識改革に努める。
3. シラバスの作成について、学部として共通の理解を持ち、それに基づいて明確なシラバスを学生に提示する。
4. 神学部学術奨励基金によって成績優秀学生を顕彰する。

神学研究科では神学部学術奨励基金を用いて、優秀な成績の学生を顕彰しているが、学部においても学習意欲を盛り上げるため同様の顕彰をする。その際、2005年度より導入されるグレイド・ポイント・アベレージ制度（GPA）の活用も検討する。

(現状の説明)

学生の学修態度は、その目的意識によっている部分が多い。その点、神学部は、キリ